

京都フィロムジカ管弦楽団 第42回定期演奏会

2018年1月21日（日）午後2時開演 八幡市文化センター(大ホール)

《 曲 目 》

ブルックナー／序曲 ト短調

Anton Bruckner (1824-1896) : Ouverture in g-moll

ドヴォジャーク／交響的変奏曲 作品78

Antonín Dvořák (1841-1904) : Symfonické variance

—休憩—

ブラームス／交響曲第2番 ニ長調 作品73

Johannes Brahms (1833-1897) : Sinfonie Nr.2 in D-dur

I. Allegro non troppo III. Allegretto grazioso
II. Adagio non troppo IV. Allegro con spirito

指揮：柴 愛

京都芸術センター制作支援事業

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

指揮者

柴 愛 (しば あい)



同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏ヴァイオリン専攻を卒業。在学中より、ザ・カレッジ・オペラハウス、関西二期会、関西歌劇団ほか、関西一円にてオペラ・アシスタントを務める。

2006年、イタリアのトッレ・デル・ラーゴにて開催されるプッチーニ・フェスティヴァルにおいて、堺シティオペラ『蝶々夫人』のアシスタント・コンダクターを務める。2010年、ウィーン国際音楽セミナーにおいて Andres Orozco-Estrada 氏のもとディプロムを取得、ファイナルコンサートを指揮する。2014年のニューイヤール・オペラ・ファミリーコンサートではアンサンブル神戸と共演するなどオペラ指揮者としての活動の場を広げる。2016年、2017年、イタリアのオルヴィエート国際夏期講習会にてマウリツィオ・アレナ氏のもとディプロム取得。ルイジ・マンチネリ国際指揮者コンクール・セミファイナリストに選出される。現在、ウィーン・フォルクスオーパー指揮者 Alfred Eschwe 氏のもと、同歌劇場で研鑽を積む。

これまでに、モーツァルト『コジ・ファン・トゥッテ』、ドニゼッティ『ドン・パスクアレ』『愛の妙薬』、フンパーディンク『ヘンゼルとグレーテル』、ラヴェル『子供と魔法』、プッチーニ『トスカ』などを指揮。

ヴァイオリンを梅原ひまり氏に、指揮を高階正光、Klaus Hoevermann、Niels Muus、Alfred Eschwe、Maurizio Arena の各氏らに師事。

♪ ロビーコンサート ♪

午後1時15分より

八木澤 教司 / 『トリプルあいす』

第1楽章：すとりべりい 第2楽章：バニラ(生チョコ付) 第3楽章：まっ茶！

フルート：

作曲者の八木澤教司(1975～)は解説で「私の知る限りフルート吹きはアイスが好き人が多い！そんなこともあり、思う存分アイスを食べ想像を膨らませて頂こうと、このテーマを選びました。可愛らしい作品に仕上げましたので、どうぞ美味しく召し上がりください！（本番前は食べ過ぎに注意！）」と書いています。3楽章からなり、それぞれタイトルが「すとりべりい」、「バニラ(生チョコ付)」、「まっ茶！」とついている可愛らしい曲です。最初の2曲はゆったりとした曲調ですが、3曲目は速めの変拍子で、がらっと雰囲気かわります。全部で5分弱の短い曲で、学生のアンサンブルコンテストでもよく演奏されているようです。今日は大人3人で、大人のアイスクリームを味わっていただけるような演奏を目指します！（御園生）

モーツァルト / 『トルコ行進曲』

トロンボーン：

チューバ：

「トルコ行進曲」として単独で演奏されることが多いモーツァルトのピアノソナタ第11番の第3楽章をトロンボーンとチューバによるアンサンブルでお聴きいただきます。ベートーヴェンの方ではない「難しい方」のトルコ行進曲を選んだことは、細かな動きを苦手とする低音の金管楽器としてはかなりの挑戦になりますが、どのようなアレンジで演奏するのかぜひ楽しみに！

クラーク / 『トランペット・ヴォランタリー』

レーガー / 『ロマンツェ』

ピッコロトランペット&トランペット：

トランペットシンセサイザー：

今回披露する作品は通常トランペットソロとパイプオルガン伴奏で演奏されます。もちろんこのホール、それもロビーにはパイプオルガンはありません。そこで今回はトランペットシンセサイザーというシステムを使ってパイプオルガンのパートを演奏します。このシステムはマイクから拾った音を信号としてシンセサイザー音源に送り、作成したパイプオルガンの音をアンプスピーカーで鳴らします。装置には音源が3つ搭載されており、あらかじめ決めた違う音を同時に鳴らすことができるため、トランペットで演奏しているにもかかわらず和音やオクターブを奏することも可能です。

本日はピッコロトランペットのソロ曲として有名なクラークのトランペットヴォランタリーと、ゆったりした楽想が印象的なレーガーのロマンツェの2作品を演奏します。

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

客演コンサートミストレス **坂 茉莉江**

1989年、大阪生まれ。相愛大学音楽学部を特別奨学生で卒業。モーツァルテウム音楽大学大学院を満場一致の最優秀にて修了。第60回全日本学生音楽コンクール大阪大会高校の部第1位、並びに全国大会第3位、大阪国際音楽コンクール高校の部第2位、第3回神戸新人音楽賞コンクール優秀賞などを受賞。「モーツァルト生誕250周年記念関西フィルコンサート」にて故羽田健太郎氏のピアノと共演、「オーストリア・ボーデンゼーフェスティバル」にてファジル・サイ氏のピアノと共演する。

これまでにソリストとして関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団と共演、多数のアマチュアオーケストラとも共演を重ねる。2016年ザ・フェニックスホールにて「第66回朝の光のクラシック」坂茉莉江ヴァイオリンリサイタルを開催。

中島美子、本多智子、小栗まち絵、大谷玲子、イゴール・オジム、ウォンジ・キム・オジムの各氏に師事。2015年9月、日本に帰国し、ソロ、室内楽奏者として幅広く活動している。

弦トレーナー **岩井 英樹**

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー **山崎 雅夫**

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(1月現在) 新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

曲目解説

遠藤 啓輔(トランペット)

ブルックナー／序曲 ト短調

19世紀の偉大な交響曲作曲家・ブルックナーは、オーストリア山中の風光明媚な農村で、小学校教師の息子として生まれた。当時の小学校は教会と一体だったため、教師はミサでのオルガン演奏など教会での業務もこなしており、ブルックナーも幼少期から父の代理でオルガンを弾いたという。こうして、農村風景、信仰、オルガンがブルックナーの音楽の根幹となる。ブルックナーはまず小学校教師となるが、オルガン演奏や地元合唱団の指導などで徐々に音楽家として頭角を現し、30歳を過ぎてからようやく本格的な作曲の修業を始める。この『序曲 ト短調』はそうした修行中の作品で、地元リンツの指揮者otto・キツラーによる指導の一環で作曲した、38歳の時の習作だ。当然、実演や出版を想定したものではないため、表情記号などに不整合が多々見られるが、小品ながら巨大なスケールを感じさせる傑作である。

ブルックナーは大器晩成型の作曲家ではあるが、その独創性は生来備わっていたものである。その証拠に、『レクイエム』など20歳代の作品を聴いても、神聖さと妖艶さがブレンドされたようなブルックナー独特の響きの色彩が、すでに完成しているのだ。ブルックナーの長く厳格な作曲修業は、生来の天才性に裏付けを与え、それをさらに拡張させるものだったのだろう。実際、この『序曲』の楽譜からは、キツラー先生の指導の成果がうかがえる。この曲は当初、クライマックスがフル・オーケストラの大音響によって断ち切られた後、弱音から仕切り直してクレッシェンドし、崇高なコーダを築き上げる、という構想であった。しかし最終的には、大音響のクライマックスが徐々にフェード・アウトして弱音になり、そこからクレッシェンドして壮大なコーダへと移行する、自然で滑らかな流れを持った形に変更された。この時期、キツラー先生はブルックナーと協業でヴァーグナーの楽劇『タンホイザー』を研究していた。途切れることなく無限に流れるヴァーグナー風の音楽を、この改訂されたコーダに見ることができる。使用するパイプをこまめに切り替えながら音楽のブロックをつなぎ合わせていくオルガニスト的発想で作曲していたブルックナーが、雄大な流れを持った音楽をも描き出せる作曲家へと脱皮した瞬間だ。この改訂は傑作・第8交響曲のコーダをも予感させる重要なものである。

この『序曲』は、フル・オーケストラの大音量が衝撃を与える序奏から始まる。トロンボーンを重用するブルックナーらしいオーケストレイションが既に聴かれるが、意外なのはピッコロを常時使用していること（ブルックナーがこの曲のほかにピッコロを使ったのは、第8交響曲の初稿のごく一部分だけだ）。このピッコロの音色が全体の響きに重要な影響を与えており、ブルックナーの高音重視の姿勢を見ることができる。「ブルックナーと言えば重低音だよね！」という短絡的な会話がなされることもあるが、それは誤りだと思う。ブルックナーゆかりの教会で音楽を聴くと、意外に高音が良く響くことに気付く。ブルックナーは、高音もしっかりと鳴る響きの中で耳を育てたのだ。この後、ブルックナーがピッコロをほとんど使わなくなったのは、実際のオーケストラの音に接し、フルートで高音の響きを充分満たせることに気付いたからだろうと想像する。

序奏に続くアレグロの主題はキビキビとしたスピード感あふれる音楽で、この時期のブルックナーがまだ作曲家としての青年時代であったことをうかがわせる。テンポを緩めて演奏される歌謡主題(譜例①)は讃美歌的で、十字架音型(4つの音符を星座のようにつなぐと十字になる旋律)から始まることも手伝って、信仰者ブルックナーの姿が前面に出ている。信仰告白的な要素は他にも見られ、例えば、トランペットのファンファーレ(譜例②)には、同時期に作曲されていた珠玉の宗教音楽・『詩篇第112篇』のもの(譜例③)が引用されている。ブルックナーは後年も、第7交響曲と『テ・デウム』の関係に代表されるように、管弦楽曲と宗教音楽を相互に共通性を持たせながら同時並行して作曲していく。

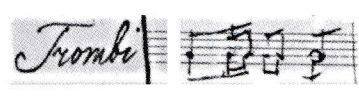
この『序曲』の終盤は、最後の審判を思わせる苛烈で厳めしいクライマックスとなり、そして、前述のような滑らかな流れでコーダに至り、救いに満ちた輝かしい響きの中で閉じられる。



譜例① 十字架音型から始まる主題



譜例② 序曲ト短調より



譜例③ 詩篇第 112 篇より

ドヴォジャーク／交響的変奏曲

Dvořák は「ドボルザーク」「ドヴォルジャーク」「ドヴォルジャック」など様々に片仮名表記されるが、原語（チェコ語）読みに比較的近いのは「ドヴォジャーク」だそうだ。ニューグローヴ音楽大事典（講談社）でも「ドヴォジャーク」と表記されているので、ここでは「ドヴォジャーク」と表記したい。

ドヴォジャークは、言わずと知れたチェコを代表する作曲家だ。彼が生まれたのは風光明媚な農村で、音楽好きの領主のおかげもあって、民族舞踏や教会音楽などが溢れていたという。そしてオルガン学校で学び、生真面目で信仰心の篤い作曲家として育っていった。この交響的変奏曲は 36 歳、1877 年の作品である。同時期の作品としては、今も合唱団によって広く愛唱されている宗教音楽『スターバト・マーテル』がある。また、この 2 年前には、彼の交響曲の中でも特に穏やかな自然の光にあふれた交響曲第 5 番を作曲している。まさに上り調子の時期の作品と言えよう。親交のあったブラームスの『ハイドンの主題による変奏曲』からの影響も指摘されているようだが、ドヴォジャークのこの変奏曲は、トロンボーンが大活躍する点がブラームスの変奏曲とは大きく異なる。トロンボーンは主に宗教音楽に使われる楽器なので、この点にもドヴォジャークの信仰心の篤さが現れている印象を受ける。編成面でさらに付言すると、もともとはティンパニ以外にも打楽器が使われていたものが、初演から 10 年以上後になされた出版の際に大太鼓とシンバルが削除されたらしい。それでもトライアングルは削除されずに残っている。ドヴォジャークの作品には、第 5 交響曲やチェロ協奏曲など、トライアングルが絶妙な味わいを見せるものがあり、興味深い。

この曲は、変奏曲の定石通り、最初に主題が提示され、続いてその主題を活用した様々な音楽が、次々とつながり合わされていく。冒頭、管楽器とティンパニが柔らかな空気を醸成する中、弦楽器によって静かに厳かに主題が提示される。この主題(譜例④)は、ドヴォジャークが同年に作曲した男声合唱曲集の第 3 曲「フィドル弾き (Já jsem huslař)」の冒頭主題の引用である(「フィドル」とはヴァイオリンのことだが、特に「フィドル」と言う場合は、村祭の踊りで元気よく弾いているような情景が思い浮かぶ)。チェコ語の歌詞は、インターネット翻訳ではまともな文章にならなかったが、女の子の美しさを愛でた、いかにも男受けする歌詞のようだ。それにもかかわらず、音楽自体はまるでグレゴリオ聖歌のように荘重だ。いかにも生真面目で信仰心の篤いドヴォジャークらしい。



譜例④ 冒頭主題

この主題を様々に加工した変奏が連ねられていくが、主題をほぼそのまま使った変奏もあれば、伴奏音型にこっそりと使った変奏もあり、変化に富む。中にはワルツ風の舞曲もあるが、ウィーンの典雅なワルツとは異なり、感情豊かで力強い。やはり、ドヴォジャークが愛する故郷の村祭の踊りなのだろう。オーケストレーションも出色で、トロンボーンが主役となる壮大なものから、ヴァイオリン独奏が活躍する室内乐的なものまで幅が広い。

そしてこの作品を特徴づけているのは終曲に使用されたフーガだ。フーガは、主題を少しずつ遅らせながら

次々と繰り返してつなげていく音楽形式である。主題それ自体が何度も聴くに足るだけの優れたものである必要があり、そして、隙の無い反復の中に気まぐれな人間感情が入る余地は無い。いわば、神の全能を象徴するのに最もふさわしい、至高の音楽形式であると言える。こうしたフーガを使用したところにも、信仰者としてのドヴォジャークの姿勢が垣間見える。

なお、この終曲には、Allegro con fuoco のテンポ指定が見られる。con fuoco は「火のように」の意味だが、この激烈な指定をドヴォジャークはしばしば使った(交響曲『新世界より』の終曲など)。彼は「fuoco(火)」に対してどのようなイメージを持っていたのだろうか。これは何の根拠もない僕の勝手な憶測にすぎないが、「火」からはチェコの英雄ヤン・フスを連想してしまう。フスは14世紀から15世紀にかけての宗教家で、チェコの民衆にわかりやすく説教をする一方、カトリック教会に対してはその腐敗を糾弾した。そのために教会からは異端視され、弾圧を受けた末にドイツで火刑に処せられたが、フスは最後まで信念を曲げなかったという。ドヴォジャークは『フス教徒』という作品も書いているので、フスに対して特別な思いがあった可能性がある。真摯なドヴォジャークは、フスが最後に身を委ねた「火」を、信念を持って生きることの崇高さを象徴するものにとらえていたのではなかろうか。全くの僕の想像に過ぎないが、そう思わせるだけの力がこの音楽にはある。

ブラームス／交響曲第2番 二長調

ブラームスが風光明媚な湖畔の保養地で作曲した作品で、そのため自然の美しさに満ちており、初演した指揮者ハンス・リヒターによって「ブラームスの田園交響曲」と呼ばれた…というのがこの作品のよくある説明だ。もちろん、これは正鵠を射ているのだが、こうしたイメージだけが先行するとこの曲の永遠に色褪せない斬新さを見落とす恐れがある。古典的交響曲の継承者のようにも取られているブラームスが、実は進取の姿勢に満ちていたことを紹介していきたい。

第1楽章は、低弦とホルン、木管が静かに応答を繰り返すようにして始まり、やがて3本のトロンボーンにチューバを加えた荘重で静かな響きに至る。このチューバの使用が、実は当時としては凄いことであるのだ。今でこそチューバは普通の楽器だが、当時はまだ登場して間もない新しい楽器であった。川崎高伸氏のご教示によれば、ヴィーン・フィルがチューバ奏者を雇ったのは、ブラームス2番を初演(1877年)するわずか2年前なのだそう(川崎氏校訂によるブルックナー交響曲第5番オリジナル・コンセプツのスコア序文より。2015年。私家版)。そうした新参者の楽器であったチューバに、しかもブラームスは、単なるバス・トロンボーンの下支え的役割を超えた重要な役回りを与えているのだ。

この後は、弦楽器が良く響くと言われる二長調の調性を生かした美しい旋律が連続し、メロディーメーカーであるブラームスの本領が発揮される。ブラームスがドヴォジャークの旋律を評価して「彼(ドヴォジャーク)の屑籠をあされば、(破棄されたメロディーを使って)交響曲が一曲書けるだろう」と言ったという有名な逸話は、彼一流の謙遜だろう。ブラームスの本領は旋律美にあると僕は思う。中でも出色なのが、次に挙げるヴィオラとチェロによる旋律だ。このヴィオラとチェロの楽譜をわかりやすく合成すると**譜例⑤**のようになるが、ヴィオラの旋律は下側で、なんとチェロはその3度上を弾いているのだ。普通の発想では、ヴィオラが上を弾いてチェロが下から支えるものだろうが、ここでは逆転している。この斬新な役割分担がもたらす絶妙な音色効果を、是非お聴きいただきたい。



譜例⑤ 第1楽章より

ゆったりとした**第2楽章**も、チェロを中心に雄渾なメロディーが滔々と流れ、ブラームスの旋律美を堪能でき

る。しかし、やはりブラームスの音楽は単に「美しい」だけでは終わらない。この楽章は口長調で書かれているが、これは弦楽器にとっては楽器の構造上の理由で弾きにくい調なのだそう。そのためか、美しさの中にも、もがくような苦しみを感じさせ、そこから救済されたいと希求しているようにも感じられる。クライマックスでは、最後の審判のラッパのように金管(音の柔らかいホルンの人数がこの楽章だけ減らされており、その分、音の鋭いトランペット、トロンボーンの影響が強まっている)が咆哮する。このように、宗教的色彩を感じさせる楽章である。なお、この交響曲第2番は、両端楽章がニ長調(D-dur)で書かれている。この調は「Deus」(神)の頭文字である「D」(レ)を主音とするため、宗教的印象を与える調である。ブルックナーやドヴォジャークが生涯にわたって宗教音楽を書いたのに対し、ブラームスは『ドイツ・レクイエム』くらいしか目ぼしい宗教音楽がなく、ブラームスがどれほどの信仰心の持ち主であったかはわからない。しかしこの第2交響曲は、全体に信仰告白的雰囲気を感じさせる。

第3楽章は、ベートーベンであれば、豪快さとユーモアを兼ね備えた主部と牧歌的な中間部(トリオ)からなるスケルツォ楽章を置くところであろう。しかしブラームスは交響曲にスケルツォを書くことを忌避していたようで、その分、第3楽章の扱いに様々な工夫をしていたことが伺える。第2交響曲の場合は、主部と中間部の雰囲気を逆転させたような斬新な音楽を書いて意表を突いた。主部は、ベートーベンであれば中間部に書きそうな、穏やかで牧歌的な音楽である。丘陵の緩やかな稜線のように上下する弦の伴奏に乗って、シャリヨモー(牧童の笛)のようにオーボエが歌う。いかにも農村で着想を得たような音楽だ。対して中間部は細かな動きとシンコペーションがせき立てるせわしない音楽になる。

第4楽章は、静かだが機敏に動く弦のユニゾンで始まる。ここでブラームスが凄いのは、冒頭の一音にだけ、金管楽器を重ねていること。はっきり言って、この金管楽器が無くても音楽は成立する。しかしこの金管の一音があることで、この先に何か凄まじい音楽が来ることを暗示しているように感じられるのだ。そして実際、音楽は劇的に爆発する。この場面は**譜例⑥**のように、弦やティンパニ(Pauken)を中心とする伴奏が、管楽器の主旋律よりも一瞬先に発進するという、狂乱じみた音楽になっている。ブラームスが私淑していたシューマンの第4交響曲のコーダに、第1ヴァイオリンだけ一瞬先に弾き始める箇所があるが、そのアイデアを援用したのかもしれない。そして最後は、トロンボーンの圧倒的なロングトーンによって締めくくられるが、これはシューマンも高く評価していたデンマークの作曲家ゲーゼの第8交響曲を範にしたものだと想像する。このようにブラームスは、他の作曲家のアイデアを機敏に取り入れ、それを自分の音楽として完全に消化してしまうことに天才的な才能を発揮したと考えられる。



譜例⑥ 第4楽章より

さて、この第2交響曲は冒頭で書いたように、湖畔の農村で作曲されている。しかし初演はヴィーン・フィルでなされていることから、ヴィーンスタイルで演奏されることを前提にしていたのだろうと想像される。それではヴィーンスタイルとはどのようなものであろうか。少なくとも僕が自分の耳で判断した限りでは、強めに発音した後はすぐに音量を減衰させるのがヴィーンスタイルだと感じる。鋭くてメリハリがあり、音楽の構成要素がくっきりと浮かび上がるような演奏だ。かつて佐渡裕が、「ヨーロッパの街は石造りなので、ちょっと音を鳴らただけでもすごく良く反響します。それと同じように、パンッ！と鋭く短く発音して、あとは残響に任せる、というのがヨーロッパの演奏スタイルだと思います」という意味のことを言っていたが(20年ほど前の公開リハーサルにて)、ヨーロッパ随一の石造りの大都会・ヴィーンこそこの表現が最も似つかわしいだろう。今回の指揮者・柴愛氏はヴィーンで研鑽を積んだ人で、まさにこのようなスタイルを体現している。穏やかな農村で着想され、都会的に鋭く演奏されることを前提に書かれた音楽。この妙味をお楽しみいただけたらと思う。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第43回定期演奏会♪

2018年6月24日(日) 長岡京記念文化会館

指揮：中村 晃之

別宮 貞雄／第3交響曲『春』

ラフ／交響曲第3番『森にて』 ほか

♪第44回定期演奏会♪

2018年12月23日(日)

びわ湖ホール(大ホール)

ブルックナー／交響曲第5番

(予定)

♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～
私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。遠方からの参加も歓迎します。関西地区以外の方々もご興味があればぜひご連絡ください！

<募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス (ヴァイオリン・ヴィオラ急募！)

オーボエ・ファゴット・トランペット / 打楽器 (※打楽器は諸条件について要相談)

〔参加資格〕 特にありませんが練習に出席できること。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕 原則日曜日(午後1～5時)、春と秋に合宿練習(大津市内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、伏見区など京都市内の各所のほか、大津市など。

〔諸費用〕 団費3000円/月(学生は1000円)、演奏会参加費など

※遠距離割引、学生割引、家族割引などあり(ご相談ください)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: recruit@kyotophil.com

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

【特典】 1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel & Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophil.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophil.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。